

8. ベートーヴェン晩年の様式

——その超越性や宗教性について——

大谷正人

(三重大学教育学部)

ベートーヴェンの古典的様式（初期）、英雄的ソナタ形式（中期）、カンタービレ形式（後期）という様式の変遷の契機としては、1802年の聴覚障害による危機と、1812年の結婚断念による危機があげられる。ベートーヴェンは、聴覚障害という悲劇の克服を、英雄的ソナタ形式（主題の徹底的操作により新しい次元の音楽を展開させていく方法）の確立によって成し遂げた。1812年以降、数年間にわたり苦悩の状態が続いたが、いわゆる不滅の恋人との別れだけでなく、経済的困難、健康問題、聴覚障害の進行、甥カールの単独後見人を目指しての奮闘なども重なり、その危機は1802年の場合よりも深刻であり、同時に創造上の危機も訪れた。死を意識し聴覚障害も重くなり、被害的になりやすく、対人関係でのトラブルも多かったが、至高のものを求めて、力の源泉を自然に求めようとした。カール問題については、カールの自殺未遂に至ったが、恋愛ではない愛情の大切さを体験した貴重な年月でもあった。1818年以降の後期作品、とりわけ5曲の弦楽四重奏曲、4曲のピアノ・ソナタなどは、中期の英雄的な表現よりも、苦悩を超越した歌にあふれた、より浄化された世界であり、カンタービレ的要素と自由化、宇宙的響きと宗教性、ポリフォニーの多用などの音楽的特徴がみられる。

マズローは、晩年に自己超越や至高体験の重要性を強調したが、これはスピリチュアリティ（霊性）と関連が深い。ベートーヴェン晩年の超越性、宗教性、宇宙的性格、特に緩徐楽章にみられる優しく慈悲にあふれた歌や、フーガやスケルツォ楽章にみられる宇宙的表現は、まさにスピリチュアリティにあふれたものであり、人々に愛と希望を与えるものである。超越性や宇宙への視点が、存在不安に対する大きな支えとなり得ることを考える時、ベートーヴェン晩年の作品における超越性や宗教性は、スピリチュアリティに関する問題が重要視されている現代において、大きな示唆を与えてくれると思う。